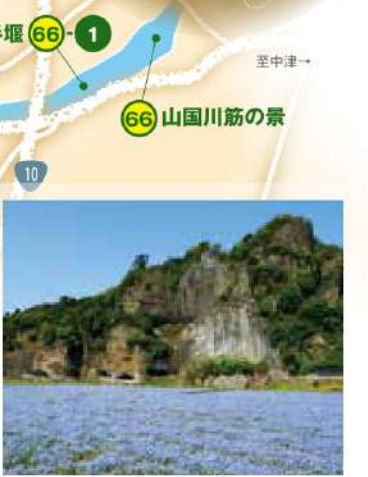


本耶馬溪

川の両岸に次々と姿を現す耶馬溪の景勝地。どうしようか迷ったら、行き先は山国川に任せてみる。川はかつて、道だったのだから。



No.66
山国川筋の景
中津市から上流の山国町まで、山国川沿いに奇岩や滝が見られます。それらの景は、耶馬溪橋や羅漢寺橋、馬漢橋といった石橋と調和し、往時の景観を思わせる。ここでは特に、川に見られる景をあける。

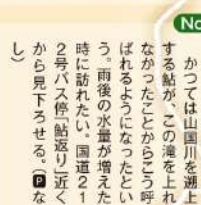
No.66-1
三口大井手堰
今から約880年前、沖代平野の水不足を解消するために人柱をたて造られた。堰の近くにある八幡市神社では、人柱の霊を慰めるとともに、五穀豊穡を願う鶴市花傘鉦神事が行われる。(●なし)

No.66-2
鮎返りの滝
かつては山国川を遡上する船が、この滝を上れなかつたことからこう呼ばれるようになったという。雨後の水量が増えた時に訪れたい。国道212号バス停「鮎返り」近くから見下ろせる。(●なし)

競秀峰の景
山、川、人の営みの三位一体の織り成す景観はまさに、耶馬溪の景勝地たる要素が全て揃っているといえる。山容を眺めるのなら山国川を挟んで対岸からがおすすめだが、峰の上から見下ろす山国川をたえた本耶馬溪の眺めも素晴らしい。詳細はP.47登山MAPを参照。(●青の洞門駐車場トイレあり)

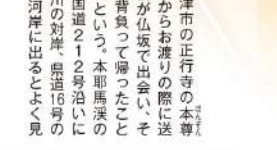
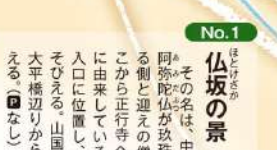
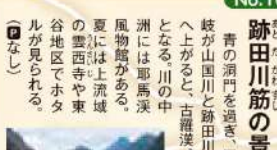
No.66-3
蕨野の滝
国道212号の七仙橋から見下ろすと、巨岩の間を勢いよく音を立てて流れる滝が見える。北には七仙岩を望み、その先の交差点そばには賢女ヶ岳の由来となった大領蕨野宮守と妻の子刀自売の屋敷跡と伝わる三日月神社がある。(●なし)

No.16
跡田川筋の景
青の洞門を過ぎ、国道212号と500号の分岐が山国川と跡田川の合流点となる。跡田川方面へ上がると、古羅漢、羅漢寺、さらには上流は鹿嵐山となる。川の中洲には耶馬溪、風物館がある。夏には上流域の雲西寺や東谷地区でホタルが見られる。(●なし)



No.1
仏坂の景
その名は、中津市の正行寺の本尊阿彌陀仏が珍珠からお渡りの際に迷った側と迎えの僧が仏坂で出会い、そこから正行寺へ背負って帰ったこと由来しているという。本耶馬溪の入口に位置し、国道212号沿いにそびえる。山国川の対岸、国道16号の大平橋よりから河津に出るとよく見える。(●なし)

No.2
競秀峰の景
山、川、人の営みの三位一体の織り成す景観はまさに、耶馬溪の景勝地たる要素が全て揃っているといえる。山容を眺めるのなら山国川を挟んで対岸からがおすすめだが、峰の上から見下ろす山国川をたえた本耶馬溪の眺めも素晴らしい。詳細はP.47登山MAPを参照。(●青の洞門駐車場トイレあり)



英彦山に発し周防灘へと注ぐ全長56キロの山国川。中津市街を広くおらかに流れる川の様相は、上流に近づくにつれ次第に細く険しくなり、それに従うように耶馬溪の景勝地は川から山へと移っていく。耶馬溪を楽しむには川をたどってみるといい。きつとその流れが道案内をしてくれる。そうして川沿いをめぐるうちに、本流から派生する支流に気づくだろう。古羅漢、羅漢寺へと導く跡田川。落合の滝、榎木の滝へとつながる津民川。深耶馬溪へといざなう山移川。気づけば、金吉川沿いの裏耶馬溪を歩いているかもしれない。なぜなら耶馬溪は、山国川が溶岩台地を削り、造り出したのだから。川は水の旅路。水とともに耶馬溪を流してみよう。

No.3
大平山の景
山国川を挟んで耶馬溪の東門を八面山とするならば、西門は大平山といえるだろう。その山肌は競秀峰と同じ集塊岩に覆われ、競秀峰の上から見る山容は勇ましい。中腹部の岩壁が群立する様は耶馬溪橋からも望める。雁股山から続く九州自然歩道の一部でもあり、青の洞門へと続く(●耶馬溪橋公共駐車場)

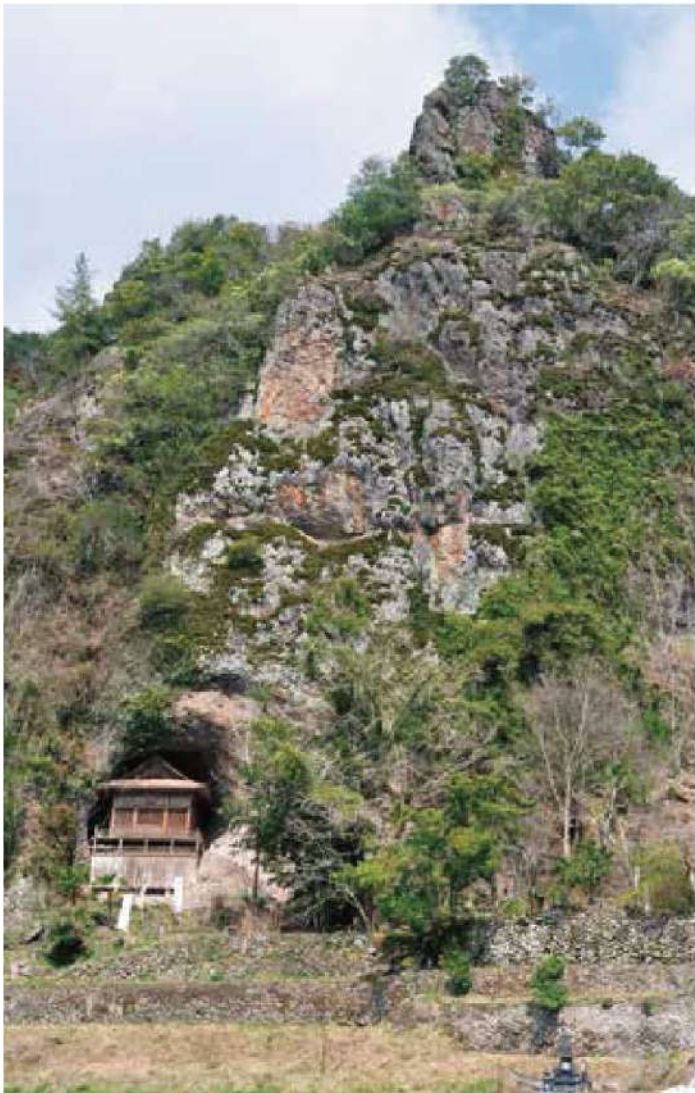
No.7
洞鳴峡の景
羅漢寺から南へ2キロほど上流の洞鳴橋から見下ろすと、その名の通り音を立てて落ちる滝と、背後にはイムレ山の絶壁がそびえる。振り返ると、古羅漢の五塔峰が見える。かつてはこの滝を登れずに留まっていた船の群が見られたとか。(●なし)

No.5
羅漢寺の景
耶馬溪層の凝灰角礫岩からなる標高270メートルの岩峰。その山腹の岩洞に建造された羅漢寺。自然景観と建築物が浑然一体となった様子が名勝たる所以である。本堂へは、羅漢寺駐車場から北へ400メートルほどの場所にある旧参道入口から苔むした参道を歩いて参りたい。羅漢寺の敷地内は撮影禁止。(●トイレあり)

No.4
犬岩・犬走りの景
山国川が鹿嵐山から流れる跡田川と合流する場所にあり、川床の岩は流れの勢いに削られ様々な形を成している。その様が犬に似ていたことからこの名がついたが、整備や洪水により現在は分りづらい。しかし、川越しに眺める競秀峰はい。国道500号の下にかかると下流橋通り。(●青の洞門駐車場より徒歩5分)

No.6
古羅漢の景
古羅漢の石仏が、一夜にして羅漢寺へ飛び移ったといわれることから山頂は「飛來峰」とも呼ばれる。探勝道が整備されており、麓からお堂が見える天人橋へは徒歩10分ほど。毘沙門天の厩屋仏や室町時代の国東塔が見られる。(●トイレあり)





蕨野勝宮守と妻の子刀自売の墓に残る一字一石経を見せてもらった。

堂内の色鮮やかな天井画。平田吉胤の名が記されている。

No.14

岩洞山の景

空に突き出た岩峰、山裾にはくり抜かれたような壁の中にお堂が見える。対岸からその姿を一目見て、吸い寄せられるように立ち寄った。

その岩峰は、観音菩薩の立ち姿に見えることから、補陀落岩と呼ばれる。山裾には窟が2つ、1つは円連洞と呼ばれ、三日月神社、賢女ヶ岳、

冠石にまつわる蕨野勝宮守と妻の子刀自売が眠っている。その麓には蕨野勝宮守が創建した久福寺がある。奈良時代に開かれたと言われる古刹である。もう一つの窟は大日如来坐像が安置されている。窟内の観音堂は大正15(1926)年に、耶馬溪鉄道

の後再建されたものだ。堂内には色鮮やかな天井画が施されており、平田集落の名士、平田吉胤の名が記されている。平田城跡へはここから歩いて20分ほど。三日月神社から平田城跡まで、ゆかりの地を往時に思いを馳せながらついで歩きたい。(なし)

No.9

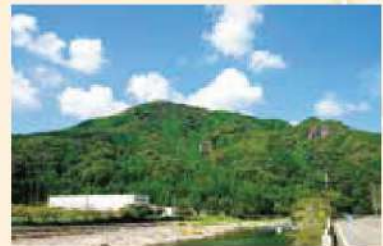
七仙岩の景

まるで大きな7人の仙人が、思い思いの格好でたたずんでいるように並ぶ岩峰。雨後の朝夕は水蒸気が立ち昇ることから起雲洞とも呼ばれる。夕暮れは七仙橋からは蕨野の洞を見下ろせる。(なし)



No.10

冠石野山の景



山国川の左岸、冠石野にそびえる冠石山の東南側山頂付近に冠石と呼ばれる石がある。蕨野勝宮守が官職を辞めた際に、対岸の屋敷(現三日月神社)から冠を投げ、それが石になったという。七仙橋の先の橋を左岸へ渡ると川沿いに耶馬溪鉄道の旧冠石野駅の看板がある。この辺りはサイクリングロードにもなっていて春には桜並木となる。(なし)



No.11

賢女ヶ岳の景

平安の頃、下毛郡の蕨野勝宮守の死後、妻の子刀自売は貞節を守り朝廷に表彰された。屋敷(現三日月神社)の裏山は賢女ヶ岳と呼ばれるようになる。神社には三日月の形をした小さな池があり、妻は夫を思い、恋はずばのしみ人の面影を一夜はうつせ三日月の池と詠んでいる。対岸のサイクリングロードから賢女ヶ岳と冠石野山の両方を見られる。(なし)





〈本耶馬溪おすすめコース〉

●七仙岩の景→競野の滝→三日月神社→
旧冠石野駅(賢女ヶ岳の景・冠石野山の景鑑賞)→岩洞山久福寺→
平田城跡(立留りの景鑑賞)→平田集落散策

※[66]山国川筋の景の指定範囲は、中津市山国町大字槻木と大字草本との境から中津市大字相原・三口大井手塚までの河川敷



〈競秀峰登山アドバイス〉

- 全行程は約2時間。歩きやすい靴で臨もう。途中で下山する場合は、妙見窟の先に青の洞門駐車場へ下る分岐があるが急坂。
- スタート地点へ戻る際は、青の洞門の手形り跡が残る地下道を通って戻ろう。

平田城跡の景

「深やら村を隔てて、そうたいして高くも大きくもない山脈が、やっぱり柔らかな落ちるに脈で屏風でも立て廻したように静かに取り巻いているのを目にした。これは好いですな。私も思わず声を立てた。」
平田城跡から望む景色をこう表現している。正面に立留りの景がそびえ立ち、その右手には木ノ子岳、雄大であり、どこかのどかで優しい。それは別名白米城とも呼ばれる所となった白米風景が広がっている。せいかもしれない。
旅のお供、洋画家小杉未醒は、ここからの景色を「耶馬溪紀行」に描いている。紀行の中には、景色を楽しむ花袋ら一行も描かれており、絵巻は2人を案内した平田吉胤に贈られた。吉胤は大正時代に耶馬溪の名勝指定に尽力した地元の名士で、馬渡



翁と称された。3階建てに改修した自宅は、客人に景観を見せてもなす

場となり、多くの文化人が訪れた。その邸宅を城跡から見下ろすことができる。
平田城は、建久年間、長岩城主の野仲重房が築城。天正16(1588)年に黒田長政の城攻めで長岩城とともに落城したと伝わる。その後、戦功のあった栗山徳後(利安)の居城となる。黒田騒動の栗山大膳が生まれ育った城でもある。白米城とも呼ばれ、名前の由来は、この地域で米が多くとれたことや、古い地名「白」からなど諸説ある。昔の建物が残る城下町めぐりも楽しい。(●トイレあり)



福土の景

山頂の形が馬に似ているために馬台城と呼ばれる。大内氏が豊後国境を抑える役割を持つ城だったが、氏滅亡を機に役割を終えた。木が生い茂り山麓からでは分かりづらい。県道111号沿い、芦木集落の背後にそびえる。(●なし)



立留りの景

雄大な絶壁の様に、道ゆく誰もが足を止めたことから名付けられた。約200年前、一夜にして大音響を立てて崩落し今の姿に。対岸の平田城跡からの眺めがよい。(●平田城跡駐車場・トイレあり)



木ノ子岳の景

トイア式の火山で、中津方面からみた姿は耶馬富士と呼ばれる。明治維新の際、大分県での倒幕運動の拠点の1つとなった山。中心人物だった高橋清臣の山荘を華府が襲撃した木ノ子岳事件の舞台でもある。(●なし)

